
気高き人

ささみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気高き人

【Nコード】

N4488U

【作者名】

ささみ

【あらすじ】

今日結婚式を迎える伯爵令嬢の瞳は揺れていた。相手は公爵家。この上なく良縁であり、こうなる覚悟もあつたはずだった。

自己嫌悪に陥る少女の後ろで、静かに扉が開いた。

願わくば、しあわせに

3話完結？だったはずが、どんどんのびそう。5話ぐらいかと。

1（前書き）

いろいろ変更した上に、話の長さを統一したくて話数を増やしました。
すいませんっ！

シェリルは背筋を伸ばして自室の鏡台の前に座っていた。
明るい真っ青な瞳が自分を見つめ返した。

砕いた真珠をたっぷりと含んだ白粉が窓から射した太陽の光に反射して輝き、いつもは背中で緩やかなカーブを描いている金色の髪は、今日はきつちりと結い上げられている。

そしてその上に載っているのはレースがふんだんにあしらわれた真っ白なヴェールに、大粒のダイヤモンドがちりばめられたティアラ。

立派な花嫁ね。

薄いバラ色をした唇が笑みを作ろうとして失敗し、歪んだ。

「なんて怪奇なお顔をなさっているのですか。」

人払いしていたはずの自室。

急に声をかけられても、シェリルは驚かなかった。

武勇で有名なピエン伯爵公が溺愛する一人娘に対する無礼な口利きにも動じなかった。

誰であるかなんて、分かり切っていたから。

「最後まで、お世辞の一つでも言えないの？」

鏡の端に映る扉の前に立つてこちらを見やる黒服の男に悪戯っぽく笑いかけると、男はわざとらしく大げさに肩をすくめてため息をついて見せた。

「一步部屋の外に出ればよいではないですか。数え切れないほどの賞賛のお言葉を浴びられると思いますよ。わざわざ私から求めずとも。」

この男が自分を褒めるわけがないとは思っていたが、あまりにも予想通りの言葉にシェリルは化粧が崩れるのも気にせず笑い出したくなった。

夜会で貴族の男達が耳元でささやいてくるような言葉が欲しかったわけではない。いつもの子供扱いではなく、最後までい少しでも女として認めさせてみたかっただけなのだが、男はいつもと変わらなかった。

彼がシェリルを女として褒めることはない。目の前の美しく着飾った少女が求めているのは、他の誰でもない彼の言葉であることなどとうにわかりきっていても。

だが、シェリルにとってどこか安心したのも確かだった。

大きな戦争も終わり、比較的平和な情勢になっているとはいえ先の戦争で手柄も大きかったダレリー「モジュール」ピエン伯爵の発言力は大きい。

その伯爵公から溺愛される一人娘のシェリル「ミンゼ」ピエンに取り入ろうとする者も、もちろん後を絶たない。

彼女に無礼なことをいう男はおそらくこの世でこの男だけではないだろうか。

だがシェリルには、その言葉がなぜかいつも心地よかった。

彼は決して嘘をつかない。

貴重な無礼男。

それは今この瞬間でさえ変わらなかった。

たとえ、明日から二度と会えないとしても。

ぎゅっと心臓を捕まれたかのような痛みを感じたが、それを表に出さず、シェリルは鏡越しに男をじっと見つめた。

どんなに時間がたって、覚えておけるように。

彼を新居へと連れて行くのを考えなかったわけではない。

だがそれを望みとして口に出すことも、誰かに相談することもしなかった。

たとえどんなに望んでも、夫が自分の妻の側にこんな男を置くことを許すはずがないのは明らかだったのだ。

新妻の側に待るには、男は若く、そして美しすぎた。

思えばしみじみと外見をみるのは初めてかもしれないことに、シエリルは気づいた。

最初にあつたときから男は美しかったが、齒にものを着せない言い方の方に心を奪われていた。

男も、シエリルを見つめていた。

稀に見ない端正な顔立ちだがちっとも女性的な雰囲気がなく、整えられた濃い黒髪は堅く、グレーの瞳は切れ長で鋭い。

そのグレーの瞳は今、シエリルのサファイアの瞳を捕らえている。

ピアン伯爵家に印象派の絵画を見に来たレルア侯爵のご夫人が男を見たときのことを思いだし、シエリルはくすりと笑った。

男がいぶかしげに片眉を器用に上げて見せたが、シエリルは何でもないのよ、と軽く手を振るだけにとどめた。

彼女は絵画を買い取るための山のようなポンドを客間のベッドに積み上げると、この男を譲って欲しいと目を血走らせて伯爵公に持ちかけてきたのだ。

まるで財宝を見つけたかのような目に怯え、シエリルは彼の黒い

袖を握りしめていた。

あのあとシェリルがいない場所で話し合いがなされたらしいが、あの傲慢で有名な侯爵夫人をどうやって引き下がらせたのか見当もつかず、しばらくたってから何度か聞いたが、忘れたと言って教えてもらえなかった。

なぜあのとき聞き出さなかったのか、とシェリルは何度も思ったが、あのときは男が家からいなくなることが嬉しくて、その夜は男に手をつないでもらって眠ることがなにより一番大切だったのだ。

あれから5年がたち、19歳になった自分が結婚することでの男と離れることになるとは、あの頃は想像すらしてなかった。

1（後書き）

だいぶ変更してます・・・。

2（前書き）

前のとほとんど流れは変わらないんですが、
細々変えています！

「慣れないおめかしに、熱でも出したんじゃないですか？」

思い出から意識が戻ったとき、すぐ後ろに男は立っていた。皮肉めいた言葉だが、言葉の端から心配が伝わってくる。

男はいつもそうだ。

冷たいのかと思えば、優しくして。

決してシェリルを突き放したりはしない。

シェリルがソファで寝てしまったときや、日傘も差さず庭で走り回り、熱射病になりかけて倒れたときもこの男がベッドまで運んでくれた。

一見細そうに見えるその服の下は、実は鍛え上げられた筋肉がついていることをシェリルはそのときおぼろげに知った。

もちろんそんなこの男を放っておかないのは侯爵夫人だけじゃない。

男が侍女達や貴族の娘達までアプローチをかけられていることをシェリルは見聞きしていた。彼女たちに対してとても紳士的であることも。

その中にはもちろんとても美しい者もたくさんいて、恋人などは仕事を理由に断ってきたらしいが、一夜の相手なら何人もいたらしいとも聞く。

シェリルが結婚したあとは仕事も減るだろう。その中の誰かを、そのうちこの男は選ぶのだろうか。

貴族の娘と結婚は無理かもしれないが、愛人ならば彼なら引く手あまただろう。

じわりと目元が熱くなり、それを見て目に見えるほど心配そうな顔をするこの男に、なにかも受け止めて欲しいと、はき出してしまいそうになる。

貴族という肩書きを背負ったシェリルには、一生口に出せない自分の気持ちを。

男が大きな骨張った手で熱を測ろうと額に手を伸ばしたそのとき
——パンツという大きな音が部屋に響いた。

シェリルは一瞬、何が起こったか分かっていなかった。

だが、ほとんど表情を変えないグレーの瞳が大きく見開かれているのを見て、シェリルは自分が何をしたのかを自覚した。

男の手を、彼女は払いのけたのだ。

初めて会ったときから無条件に男を慕っていたシェリルにとって、それは初めての拒絶だった。

シェリルは男以上に目を見開き、愕然として自分の手に視線を落とした。

そして、自分の行動の意味を悟った。

それは、抑えられない自分の気持ちの表れだったのだ。
本能と言ってもいいのかもしれない。

「・・・大丈夫です。あなたは仕事に戻りなさい。」

そう男に告げたシェリルの顔つきは気品あふれる立派な伯爵令嬢であつた。

男はしばらく黙つたまま彼女を見つめていた。
彼の目にももう驚きは見られず、むしろ穏やかでいて、それでいて激しい感情を隠しているようにも見えた。

だが男は急に何かを振り切るように頭を振ると目を伏せて一礼し、そのまま扉を出て行った。

それを見届けたシェリルの頬に、一筋のしずくが伝った。

彼女の手は、花嫁としてシルクの手袋をはめている。

それをはずすのは、神の前であり、夫であり、リングをはめるとき。

シェリルがそれをはずすわけにはいかず、手袋でぬぐうわけにもいかず、それ以上あふれだそうとするものをおさえるために彼女は天使の描かれた天井を見上げた。

もし何だかんだ甘いあの男に泣きついていたら、遠い国に連れ去ってくれただろうか。

だが結婚相手はこの国に3つしかない公爵家の御当主。

一度お会いしたが、穏やかそうな顔立ちで鋭い目つきの方だった。彼はこんな小娘に振り回されるのを良しとは決してしないだろう。

今日が結婚式なのだ。

今更結婚式をとりやめるなど、ひどい醜聞だ。

たとえ国を治める陛下であつても、そんな横暴なまねは許されない。

すべてを捨てて伯爵家を出たところで、間違いなく伯爵家はお取りつぶしだろう。

そんなこと、できるはずがなかった。

だが、自分は本能からあの男が好きだったようだ。
あの手を払いのけたことにより、シェリルは自覚してしまった。

他人の花嫁になるために纏った装束で彼に触れられることはできなかったのだ。

シェリルは誇り高いピエン伯爵家の娘だ。
それは生きている限り変わらない。

その彼女が、あの男に想いを告げることは一生叶わない。

だが、一人の女として、あの人に対しては、他の誰の者でもない、
ずっと彼を思い続けていた一人の娘のままでいたかった。

あの手を払いのけることで、この感情を、一生持ち続ける覚悟を
決めた。

そして同時に他の人のもとに嫁ぐ覚悟を決めたのだ。

それを彼は気づいただろうか。

あの最後の視線は何を意味していたのだろうか。

そこまで考えて彼女はめをつぶった。

どちらでもいいことだ。

シェリルがあの子にこれからできるのは、ただ祈ること。

もう目元の熱は冷めていた。

唯一一人恋した人よ。

側にいることは叶わないけれど

願わくば、幸せに――

美しく強い少女は今度こそ自分に向かってしっかりと微笑み、白
いヴェールでその顔を隠した。

シェリル＝ミンゼ＝ピエン

もうすぐ神の前で公爵と永遠の愛を誓う伯爵令嬢

彼女は一生で一度の恋をしている

相手は 伯爵家の美しすぎる侍従長

2（後書き）

嘘つきました。

だいぶかわってますねー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4488u/>

気高き人

2011年11月16日15時43分発行